



ケマル・アタテュルクへの敬愛の形成と強化：トルコ共和国建国記念日における大統領言説の批判的談話分析

関，颯太

(Citation)

六甲台論集. 法学政治学篇, 70(2):43-63

(Issue Date)

2024-03-22

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/0100488535>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488535>



ケマル・アタテュルクへの敬愛の形成と強化： トルコ共和国建国記念日における大統領言説の 批判的談話分析

関 颯 太

1. はじめに

本稿は、トルコ共和国の建国者、近代化と世俗主義改革の象徴であるケマル・アタテュルクの遺産が、これまでの大統領によってどのように語り継がれ、社会におけるその崇拜が形成、維持、そして強化されてきたかを明らかにすることを目的とする。

アタテュルクがこの世を去ってから2023年11月5日で85年が経ったが、そのトルコ政治社会への影響は依然として大きい。2023年12月29日、トルコのサッカーチームによる決勝戦がリヤドで予定されていたが、サウジ当局がアタテュルクの横断幕などの表示を認めなかったことから、両チームは抗議として試合を行わずにトルコに戻ることを選び、試合も延期となった（Akin 2023）。アタテュルクが亡くなった日や建国記念日には、英雄が永遠の眠りにについている記念碑墓廟（アタテュルク廟）へ多くの人々が集う。彼らは共和国が今日まで存続していることに感謝と祝賀の言葉を贈り、国父に深い追悼の念を捧げるため、静謐な追憶の碑前に足を運ぶのである。

しかし、彼の思想や政策に対する毀誉褒貶が存在し、批判や異議もあることが指摘されている（cf. Aytürk and Esen 2022）。アタテュルクへの敬愛は、トルコの政治的、社会的、文化的変容と密接に関連しており、これらの変化に影響を受けて、近年では政治的な道具として利用される一方で、抵抗のきっかけにもなっている（Akkoyunlu 2023）。特に、イスラームの価値観を重んじる政治の台頭は、制度的、規範的にアタテュルクの足跡を消そうとする動きと結びついている（Lüküslü 2016; Yanarocak 2017）。このようにアタテュルクへの敬愛はトルコの国家アイデンティティや社会統合の基盤としての役割を果たしつつも、国内の政治的・社会的な対立に影響を及ぼしている。

では、アタテュルクに対する社会的な崇拜は、どのように形成され、維持、強化されてき

たのだろうか。この問いを明らかにするために本稿は、建国記念日における大統領の言説に着目して分析を行う。また、アタテュルク廟で行った現地調査をもとに、国民によるアタテュルクへの崇拝の現代的な諸相に光を当てる。大統領の権限や憲法上の位置づけは時代によって変容してきたが、その建国記念日の発言は、翌日の新聞の一面で報じられ、国民の注目を集めるものであった。政治指導者個人への尊敬の強化において特に重要なのは指導者崇拝の儀式に参加する度合いである (Márquez 2018)。儀式は感情を強め、指導者への肯定的な感情の増幅器として機能する。特定の指導者に愛着を持つ人々が儀式に参加することで、指導者の象徴を中心に結ばれた特定の共同体を強化する。トルコの事例では、この儀式の中で最も多くの国民が集団的に行うのが共和国建国記念日におけるアタテュルク廟参詣にあたり、その際にアタテュルクに対する言葉を述べるのは大統領である。このため、大統領の存在はアタテュルクの崇拝の形成と維持、強化を考察する上で重要である。

先行研究は、アタテュルクへの支持が維持される過程を分析するにあたり、参加者数や国家建設を祝う点で最大かつ最重要の儀式に位置づけられる建国記念日のアタテュルク廟参詣に焦点を当てていない。また、建国記念日の大統領の言説を分析の際に考慮に入っていない。本稿は、これらの点を補うことで、アタテュルクへの崇拝の形成や維持、強化過程をより深く理解することができるかと主張する。

本稿の分析枠組みは、批判的談話分析 (Critical Discourse Analysis, CDA) に基づく。CDA は、ある問題のテキスト、ディスコース実践、社会的実践の3つの次元を複合的に研究するアプローチである (van Dijk 1993)。具体的には、テキストの次元では、アタテュルクへの崇拝の仕方という観点から言説の内容を分析する。ディスコース実践の次元では、大統領の価値観、出自といった大統領自身のアイデンティティという観点から言説の生産・流通・消費のプロセスを分析する。社会的実践の次元では、国内外の情勢という観点から言説の社会的・政治的影響を分析する。CDA による分析は、大統領による政治的言説の特性を説明するだけでなく、その背景となる大統領の価値観、イデオロギーといった社会認知的表象や、当時のトルコ国内外の情勢といった社会政治的文脈と関連づけることができる。

本稿の結論部分に先駆けて記述するならば、次の二点が分析の結果、明らかになった。第一に、アタテュルク廟が1953年に完成し、アタテュルクが安置されたことが、大統領によるアタテュルクへの礼賛の言説の顕在化に寄与した。第二に、大統領による崇拝の言説は一樣ではなく、異なる大統領が抱いたアタテュルクのイメージの多様性が認識される。これらには、アタテュルク廟の完成が集団的な崇拝儀式を行う象徴的な場として受け入れられたこと、大統領の価値観、時の国内外の情勢の変化が影響していると考えられる。そして、アタテュルク廟の現地調査では、国民によるアタテュルクへの崇拝の儀式の様相を確認した。

本稿の構成は、以下のとおりである。第2節では、政治指導者の崇拝や、アタテュルクへの崇敬の社会的形成過程に関する先行研究を検討し、本稿の研究の意義と位置づけを明らか

にする。第3節では、建国記念日における大統領の言説の分析を行う。分析により、大統領がいかにアタテュルクを語り、いかにアタテュルクへの崇拝を形成し、維持、強化してきたのかを明らかにする。第4節では、アタテュルク廟での現地調査からアタテュルクに対する今日的な崇拝の様態を考察する。そこでは国民がどのようにアタテュルクへの崇拝を表現し、体験し、共有しているのかを明らかになる。最後に、本稿の結論と課題について述べる。

2. 先行研究の検討

政治指導者への支持、崇拝に関する研究

まず、政治指導者への支持や崇拝、その正当性に関する研究から知見を導き出したい。政治指導者に対する尊敬と正統性は、カリスマ、宗教的・民族的感情、英雄崇拝、権威への依存、正統性そのものの認識の組み合わせに影響される。これらの要因はそれぞれ、政治指導者に対する長期的な崇拝と尊敬を醸成する。

支配の3形態の一つ、カリスマによる支配とは、「恩寵（カリスマ）という非凡で個人的な賜物の権威、啓示や英雄主義やその他の個人のリーダーシップの資質に対する絶対的に個人的な献身と個人的な信頼」である（Weber 1946:78-81）。つまり、カリスマに従う人々は伝統や法令ではなく指導者を信じるゆえに従うとされる。

では、カリスマ的な指導者による支配が受け入れられやすいのはどのようなときなのだろうか。心理学的には、正当性は、権力や制度が人々に受け入れられるべきだという信念であり、特に危機や衰退の時期、つまり即時の自己利益に訴えることが難しい時期や、集団への忠誠を保ちつつ長期的な利益を得るリスクがある時期に重要性を持つという（Tyler 2006）。ここには、カリスマ的な指導者が誕生する際の条件と重なるものが見られる。カリスマは、指導者の性質、支持者の傾向、政治的伝統や制度の強さ、政府への依存度、危機の存在という五つの要因の相互作用によって生じるという（Davies 1954）。

危機に瀕していない国でも正当性は重要である。アメリカでは、建国の父たちや歴代大統領に対する尊敬が政治的正統性を測る際の重要な指標となっている（Lipset 1959:89）。オーストラリアでは、君主制への支持が社会化、ジェンダー、民族ナショナリズムなどに影響される（Mansillo 2016）。タイで国王への国民の敬愛が社会的に定着した背景には、戴冠直後のメディア戦略と、全国規模の地方行幸の相乗効果による知名度と威光の向上があった（櫻田 2023）。

権威主義体制では特定の個人に対する尊敬や正当性はどのように議論されているのか。個人主義独裁では政治組織や軍事組織が未発達なため、一人の指導者が政策や人事を決める（Geddes 2003:53）。その特徴は、指導者個人が権威の源泉であり、権力が指導者への接近、親密さ、依存、支持に依存していることである（Huntington 1991:111）。では、指導者個人

への支持を強めるのにはどのようなメカニズムが働いているのだろうか。それは、支配によって生み出される利害や忠誠に対して支払う報酬と支配者による報復の応酬に基づいている (Linz 2000:152)。個人主義独裁下では、独裁者を超人と信じ、不変の愛を行動で示すことが、崇拜のシグナリングとなるため、沈黙や否定のなさだけでは不十分である (Marquez 2018)。

これらの研究の知見は、アタテュルクへの崇拜に部分的に適用できる。アタテュルクは、救国の英雄として崇敬され、メディア戦略などによってその崇敬が維持された。しかし、アタテュルクへの崇拜は、個人主義独裁での指導者崇拜ほど強制力を持たない。さらに国民が指導者を熱心に崇拜し、その多くが墓廟に参拝するということが指導者の死後 85 年間も続いていることは、説明することはできない。

アタテュルクへの崇敬、支持に関する先行研究

アタテュルクとは、共和国と国民にとってどのような人物なのだろうか。アタテュルクへの崇拜に関する先行研究を整理する前に共和国の建国に至るまでの背景について概観したい。

19 世紀後半から 20 世紀初頭、欧州列強の圧力と民族主義の台頭に苦しんだオスマン帝国は、国内の改革の勢い虚しく領土を失っていった。そして、第一次世界大戦に敗れ、連合国に占領され、セーヴル条約で帝国の領土は事実上解体されることになった。国土を守るためアタテュルクは国民闘争を起こした。アンカラ政府を樹立、国民協定と国民誓約を発表し、大国民議會を開いた。アナトリア各地での激戦を制し、ローザンヌ講和会議では、国民誓約で宣言した領土のほとんどを回復した。その後、共和国建国を宣言したアタテュルクは、ビュユック・エンデル・ガジイ偉大な指導者として国民から敬愛されるに至った。

では、アタテュルクへの崇拜、支持の確立に関してはどのような議論がなされてきたのだろうか。本稿と問いを共有した先行研究は、あまり多くはない。このため、ここでは、アタテュルクに対する崇拜の形成の過程と背景に関する研究も先行研究として扱い、それらの課題を整理した上で本稿の位置づけを示したい。

先行研究は、アタテュルクに対する崇拜の形成と維持の過程を制度的、社会的側面から明らかにしてきた。「アタテュルク」への崇拜としてカルト、神話、シンボル、儀式が生み出された目的には、ナショナリズムのイデオロギーと国家が支配するあらゆる場所へのその植え付けを通じた国民国家建設が念頭にあった (Kucukcan 2010)。このため、アタテュルク崇拜の発展は、共和国の発展とともに論じられる傾向にある (e.g., Bozdogan 2002; Ozyurek 2006)。

アタテュルクの神格化は彼が存命中から始まっていた。1923 年から 1938 年までの共和政初期には、共和政の成果とケマリストの教義を賛美するあらゆるジャンルの文学作品が無数に生み出された (Firidinoğlu 2011)。1934 年、ムスタファ・ケマルにトルコ人の父^{アタテュルク}という姓を与える法律が可決され、同月に成立した別の法律で、個人名としても姓としても同じ名前を採用することを違法とされた (Türköz 2014:57)。1951 年 7 月に法律第 5816 号アタテュ

ク擁護法（Atatürk Aleyhine İşlenen Suçlar Hakkında Kanun）⁽¹⁾ が施行されたことは、1950年代初頭には、「アタテュルク」が共和国の統治に一定の正当性を付与する存在になっており、「アタテュルク」がある意味で政治的に利用される存在になりつつあったことを示唆する（岩坂 2011:36）。

1980年代にはアタテュルクへの敬愛をより強固に社会に定着させようとする試みが行われた。1980年クーデター以降には、アタテュルク主義が「公定化」し、教育カリキュラム⁽²⁾にも大幅に導入された（岩坂 2011）。その一方で、同時期より偶像化されたアタテュルクの事績を学問的に公正に評価し、批判的に検討しようとする試みも見られた（小笠原 2023, 277）。

1990年代以降、親イスラーム政党⁽³⁾ が台頭した。それに対する抵抗や反対の手段として、アタテュルクの象徴や儀礼が活用された（Çaymaz 2019）。これらの行為は、親イスラーム政党によってもたらされた社会の対立、独裁、腐敗、正義の曲解、貧困の深刻化といったトルコの20年間の経験に対する不満や反発の表れであった。同時に、アタテュルクと彼のイデオロギー的遺産に新たな命を吹き込むことにもなった（Akkoyunlu 2023, 62）。

本稿は、これまでの研究成果を引き継いだ上で、新たな問いに挑戦したい。それは、大統領がどのようにアタテュルクを語り、アタテュルクに対する社会的な支持を維持させたのかである。アタテュルクに対する崇拝の形成とその維持と強化においては政治エリートの存在が最も主導的な役割を果たしてきた。トルコの大統領は1924年以来、議会によって選出されていた。その権限は、1982年憲法によって立法、行政、司法の各領域において拡大した。2007年、大統領の直接選挙制が採択された後、2017年憲法改正ではその権限をさらに強化する「集権的大統領制」が導入された（間 2023, 187–88, 190–96）。アタテュルクへの支持を維持する過程では、共和国記念日という建国の英雄、アタテュルクに対しての追憶の念が最も高まる日の翌日に新聞の一面で報じられたのが、大統領の言説であった。本稿では、建国記念日における大統領の発言を分析の主眼に据えることで先行研究とは別の角度からアタテュルクへの支持が形成、維持、そして、強化される過程を明らかにすることを試みる。

-
- (1) 同法に違反したとみなされるのは、アタテュルクの記憶を侮辱する罪、アタテュルクを象徴する胸像、彫像、写真を破損する罪、アタテュルクの墓を汚損、破壊、冒涇する罪である（T.C. Resmi Gazete 1951）。
 - (2) トルコ国民がアタテュルクを意識するの教育の早い段階から始まり、国の祝祭日などのセレモニー、演劇により暦のサイクルの間、組織的な場で行われる（Türköz 2014, 54）。
 - (3) トルコの親イスラーム政党は、「イスラーム的な規範に依拠しながら、イスラーム的理念に合致する社会の実現を目指して、体制を整え、処方箋として具体的な政策を実施していく」（澤江 2005, 69）と言われる。

3. 分析枠組み

本節では、政治指導者個人に対する崇拝が、どのようなメカニズムによって強化され、維持されるのかを理論的に検討する。そのために Márquez (2018) が提唱した政治指導者のカリスマ的權威の形成と維持のモデルを取り上げ、トルコの事例に適用する上での有効性を考察する。また、崇拝の形成と強化に関する大統領の言説を分析する際には、批判的談話分析 (Critical Discourse Analysis, CDA) の分析枠組みを用いる。

Márquez は、これまで歴史的に様々な政治的指導者への崇拝の事例が多く存在しつつも、その形成と発展に関するモデルが提示されてなかったとして、指導者崇拝の形成を説明する「プロパガンダ」モデルと、指導者崇拝の強化を説明する「儀式」モデルという2つの枠組みを提示した。指導者への崇拝は、指導者と体制の両方を正統化するためのプロパガンダの一形態として概念化することができる。それは、公的機関が指導者をカリスマ的存在として入念に練り上げた表現を大量に生産・流布する（あるいは生産・流布を奨励する）ときに出現する (Márquez 2018, 268)。その目的は、特定の体制とその指導者の象徴的正統化の戦略として、民衆が指導者に高度の感情的愛着を抱くようにすることである。

しかし、プロパガンダは、それが意識的な政治戦略として採用される範囲では、指導者への支持を「シグナル」する圧力を強めるものの、本物の愛着はあまり生み出されない。そこで重要となるのが、指導者崇拝の儀式とその儀式への参加である (Márquez 2018, 275–79)。指導者や指導者に関連する象徴に焦点を当てた崇拝の儀式は、単に受動的に指導者のプロパガンダを消費するだけでなく、指導者に対する高いレベルの尊敬、崇拝さえも信憑性をもって示すような行動をとることが期待される。儀式が定期的に成功すれば、指導者の象徴を中心に団結した共同体への帰属体験が生じる。儀式は感情を強め、指導者への肯定的な感情の増幅器として機能する。特定の指導者に愛着を持つ人々が儀式に参加することで、指導者の象徴を中心に結ばれた特定の共同体を強化する効果がある (Márquez 2018, 278)。

トルコの事例に当てはめると、プロパガンダは、アタテュルクに対する崇拝を形成する教育カリキュラムやメディア、法律、政治指導者の発言である。儀式は、国家の祝日やアタテュルクが逝去した日における集団的な祝賀や追悼である。その際に儀式が執り行われる場所の中でアタテュルクに関連する最も象徴的な場所は、アタテュルク廟だと考えられる。統計上、アタテュルク廟に最も多くの国民が訪れるのは建国記念日である (Genelkurmay Başkanlığı 2011, 2023)。そして、建国記念日において大統領が発した言説は、翌日の新聞で報道されてきた。以上より、儀式的な性質を有する建国記念日において大統領の言説というプロパガンダは、アタテュルクへの崇拝がどのように維持、強化されていったのかを紐解く重要な史料となる。

本稿は、CDA の分析枠組み (van Dijk 1993) より大統領の言説を検討する。Fairclough

(2013) に従い、テキスト、ディスコース実践、社会的実践の3つの次元から分析を試みる。具体的には、テキストの次元では、アタテュルクへの崇拝の仕方という観点から言説の内容を分析する。ディスコース実践の次元では、大統領の価値観、出自といった大統領自身のアイデンティティという観点から言説の生産・流通・消費のプロセスを分析する。社会的実践の次元では、国内外の情勢という観点から言説の社会的・政治的影響を分析する。批判的に政治家の演説や書き記した文章を分析するにあたっては、単に政治的レトリックの興味深い性質を説明するだけでなく、態度、規範、価値観、イデオロギーなどの社会認知的表象と関連づけることが求められる (van Dijk 2005:66)。

4. 大統領の言説分析

本節では、共和国建国記念日における大統領の言説を CDA の分析枠組みから検討する。まず、先行研究 (今井・岩坂 2023) に基づき、トルコの歴史を5つの時代に区分し、それぞれの時代の転換期や新たな時代の到来に近い記念日に焦点を絞る。今井・岩坂 (2023) によれば、トルコの政治史は、5つの時代に区分できる。それは、共和人民党 (Cumhuriyet Halk Partisi, CHP) の一党制時代 (1923～1950)、初の政権交代を果たした民主党 (Demokrat Parti, DP) の時代 (1950～1960)、1960年クーデターから1980年までの「第二共和政」の時代、オザルが首相と後に大統領を務めた時代 (1983～1993)、1990年代の不安定な連立内閣の時代 (1993～2001)、そして2000年代以後の AKP が与党を務める時代 (2002～現在) である (今井・岩坂 2023)。

1923年からの建国10年ごとの記念日の多くは、それぞれの時代の転換期や新たな時代の到来に近いものが多く、トルコの歴史の変遷を捉えるのに適している。具体的には、1943年、1953年、1963年、1973年、1983年、1993年、2003年、2013年、2023年の建国記念日である⁽⁴⁾。国家のアイデンティティと将来を再確認する機会となる建国記念日に際して、大統領は、建国の父への崇拝を含んだそれまでの国家の歩みとこれからの将来を意識した言説を発することで、アタテュルクへの崇拝を維持し、強化しようとするのが考えられる。以降、建国記念日における大統領の言説を、CDA の分析枠組みからアタテュルクへの崇拝の維持と強化の過程における変化を明らかにする。

(4) 1933年はアタテュルクが存命しており、建国記念日の演説もアタテュルク自身が行っていたことから分析には含めない。

1943年10月29日—世界の中で平和裏に存在する共和国

共和国建国 20 年の節目において、国家の指導者、イスメト・イノニュ大統領による演説が行われた (*Cumhuriyet* 30 October 1943)。イノニュは演説の冒頭、20 年というのは国家にとっては、短く、人間にとっては長い年月であることを強調した。そして、「私たち高齢者は、共和国の 20 年を一日一日注意深く見守ってきた」と述べた (*Akşam* 30 October 1943)。イノニュは、アタテュルクとともに独立戦争を戦い、司令官を務めた。自らを「高齢者」と呼んだイノニュは、当時 59 歳だが、20 年の建国記念日においては、共和国建国に向けてアタテュルクとともに闘争の最前線に立ち続けたことに想いを馳せていたのかもしれない。

また、国民の結束の強さと国家の偉大さについて言及したイノニュからは、「国民は共和国に、国内外におけるあらゆる安全の堅固な基盤を見出した」との発言も見られた。当時、欧州では連合国と枢軸国の間で激しい戦闘が続いていた。共和国の基本的な外交指針は、アタテュルクによって示された「国内に平和、世界に平和」である。これは、国内の安定に加え、国際社会においても平和裏に生存することを意味する。第二次大戦、イノニュは、ケマルの遺した外交指針を堅持し、枢軸国、連合国両者からの参戦の説得やプレッシャーには応じず、国家と国民の安全を優先し、1945 年まで中立を貫き通した (Hale 1993:81–82)。

1953年10月29日—民主的な政権交代と繁栄

1950 年 5 月、DP が 487 議席中 416 議席を獲得し、初の民主的な政権交代が実現した。新たに大統領となったバヤルは、共和国建国から 30 年を迎えた日、「偉大なるトルコ国民は、共和国こそが他国に自由と繁栄をもたらす至高の体制であると心から信じている」と述べつつ、「共和制に賛成した議員の中には、新体制が国内に定着するためには 10 年間の安定期間が必要だと考えた者もいた」と「安定期間 (ömür)」について言及した (*Cumhuriyet* 30 October 1953)。この期間とは、アタテュルク死去後の CHP による一党体制のことを示唆していると考えられる。DP の選挙の勝利は、CHP による体制への国民の不満の現れであった。DP は、国家の介入主義的な経済政策に息苦しさを感じた地主、小規模な製造業者、国家官僚の高圧的な態度に憤りを感じていた村人たちの支持を得た (Çagaptay 2020:25)。首相となったメンデレスは、エーゲ海沿いで農業を営む地主一族の出であり、当時の人口の大部分を占める農業階級の間で社会的な名声を有していた。また、1940 年代末、中央集権化により農村でも徴兵や徴税が行われ、人びとの社交の場でもあった神秘主義教団の修行場などが世俗主義改革の一環で閉鎖されたことへの反発があった (新井 2001:234 – 237)。

また、バヤルは「この 30 年間、共和国を守り支えてくれた大小さまざまな国民の貢献のおかげで、私たちは国家の統一と平和を目の当たりにしてきた」と共和国のこれまでの歩みを支えてきた体制のもたらした恩恵と功績に謝意を示した。バヤルは、1920 年の独立戦争でアタテュルクとともに従軍し、1937 年には首相の座に就いたこともあった。そして、ア

タテュルクによる将来の共和国の発展を予見する言葉を引用し、「長い期間（devre）を経て」そのとおりに共和国は発展の道を歩んでいると述べた（*Cumhuriyet* 30 October 1953）。1950年代初頭は、新政権にとって成功の年だった（Hale 1993:94）。地方にインフラを整備したほか、工業を民間企業に開放し、農業により多くの資源を投入する経済計画は、大きな配当をもたらし、国民所得は1950年から1953年の間に40%増加した。全般的な経済の好調は、国内での政府の人気と、複数政党制全体への信頼を高めた。

1963年10月29日クーデター後の逆境と不安定期

1960年5月27日、軍がクーデターにより政権を奪った。クーデターは、DP政権によるアラビア語によるアザーンの許可、世俗主義への批判、輸入超過による物価の高騰や報道や出版に対する圧力、CHPに対する批判への軍の不満を背景としていた。議会は解散され、1961年新憲法制定と同年10月の総選挙で民政移管が行われるまで期間の軍事政府である国家統一委員会（*Millî Birlik Komitesi*）が国政運営を担った。新憲法承認後、後、1961年の選挙で、DPの後継政党である公正党（*Adalet partisi*, AP）が第一党となり、CHPとの連立政権が発足した。

その後、ギュルセルがトルコの第4代大統領が選出された。ギュルセルは、国民闘争をケマルやイノニュとともに戦った後にも軍に残っていた。クーデター当時はすでに退役していたが、共和国再建のために国家統一委員会で中心的な役割を担った。ギュルセルは、自らが大統領に就くことでクーデター後に国内で噴出する可能性がある極端な思想やその対立を防ぐことを目指しており、愛国心を優先することで、合理的で慎重な政策を意図していた（*Köprülü* 2018:41）。

ギュルセルは10月29日、議会での祝典にのみ参加し、アタテュルク廟⁽⁵⁾での祝賀には、代理でスアト・ハイリ・ウルギュブリュ上院議長が出席した。ウルギュブリュは、廟の特別帳簿⁽⁶⁾に「唯一無二のアタテュルク、私たちは、あなたが愛し、信頼した気高いトルコ国民とともに築いた共和国の40周年を祝うために、あなたの前にいます」との書き出しで、アタテュルクに向けて「逆境においても繁栄においてもあなたから力を引き出し、あなたの不可能性に身を寄せる私たちは、あなたの原則の守護者です」と綴った（*Cumhuriyet* 30 October 1963）。

1963年、共和国は、1960年クーデター後の不安定な時期にあった。民政移管後の2年間で

(5) アタテュルクの身体は死去した後、一時的に民族学博物館に安置されたが、1953年11月10日にアタテュルク廟に移された。

(6) 特別帳簿（*özel defteri*）とは、アタテュルク廟に設置されている特別な記帳台のことである。帳簿には、日本の首相を含むトルコ国内外の要人も記帳をしている。

二度のクーデター未遂事件を経験したほか、右派と左派の対立により治安が悪化し始めていた。また、DP 政権期に、ケマルの原則のうち、世俗主義、国家資本主義、人民主義が大きな変容を迫られ、革命主義にも停滞が見られた。そのような共和国の変容の時代に迎えた記念日に臨んだウルグユプリュは、ケマルの原則の守護者であることをことさらに強調した。

1973年10月29日―書簡によるクーデター後に迎えた50年記念日

建国から半世紀となる共和国記念日は、軍による「書簡クーデター」を経て、民政移管が行われてから約2週間後にあたる。当時、トルコの政治と社会は混乱の渦中にあり、経済面でも生活費の高騰についての記事が掲載されていた。学生運動の激化に加え、左派系の過激派組織による銀行襲撃などは治安の悪化に拍車をかけた。

10月29日、ファフリ・コルトユルク大統領はアタテュルク廟を訪れ、献花をした。大統領は、廟の特別帳簿に「偉大なる指導者アタテュルクよ」との書き出しで「崩壊した帝国から、何千もの苦難と苦難を経て、血を流して、建国した共和国の50周年を迎えたこと」を受け、「自己と未来への自信を深め、その信頼を守ること」を誓った。そして、トルコ国民を「強く、国際的に尊敬される国民」と位置づけ、アタテュルクへ「深い感謝と賞賛を最も誠実な気持ちで改めて表明します」と書いた（*Cumhuriyet* 30 October 1973）。

コルトユルクは、特に建国に至るまでの国民闘争の苦難と払われた犠牲、そして、強い国家だけでなく、その国際的な評価についても言及した。また、ケマルに対する尊敬の念を強く感じさせる内容であった。こうした内容の端々からコルトユルク自身の経歴が読み取れる。コルトユルクは、共和国建国後に開学した海軍兵学校の最初の卒業生の一人であり、アタテュルクよりコルト^{トルコを守る}ユルクという姓を与えられた。最終的に海軍大將にまで上り詰めた後、軍を退役してからは、外交官を務めたのちに上院議員に選出された。

1983年10月29日―軍事政権下の共和国記念日

1971年の軍事介入により政治的、社会的な混乱は一時的に一定程度収まったように見えたが、70年代後半から悪化することになる。選挙後は、小党が乱立する状態が続いた。左右の政治対立と暴力がさらに激化し、学生や労働者、デモ隊と警察の衝突、テロ事件では日夜死傷者が出た。1980年9月12日、エヴレン参謀総長らがクーデターを敢行した。クーデター後、軍は国家安全保障評議会を設立して国政を掌握し、政党や労働組合の活動を禁止した。国民は、共和国建国60周年の記念日を、軍事政権下で迎えることとなった。

エヴレン大統領は、過去の政治では「一部の政府高官が共和国の基本原則を完全に実行」できず、「政治的利益を優先し妥協し、近代文明の方向への社会の発展、国民の団結、宗教と国家の分離、社会平和の確保に注意を払わなかった」と非難した。そして、それにより共和国が「何度も奈落の底に突き落とされた」と述べた。一方、11月6日に予定されている国

会議員選挙に言及し、トルコが再び議会制度に戻ることを強調し、共和国が「今、新たな精神と興奮の中」にいると話した。そして、「一部の層の非現実的で理不尽な誹謗中傷の取り組み」があるが、共和国は「あらゆる困難を克服するために常に我々を導いてきたアタテュルクの原則に忠実であり」、「その威信が日に日に高まり」、トルコは「地域の平和と安全の象徴となっている稀有な国家のひとつ」だと力説した（*Cumhuriyet* 30 October 1983）。

演説では、将来の展望を描きつつも、当時のトルコの政治的混乱や社会的課題に言及し、国政を担う政治家による政治的利益の優先に起因するものであると非難したほか、地域の平和と安全についての言及が見られた。この発言には1979年にイラン・イスラム共和国の成立やその後にはイラクの間で1980年に始まった戦争を意識していると考えられる。

また、国家の安定と健全な民主主義の回復に向けた努力が行われていることを示唆し、アタテュルクの理念に対する重要さとそれを軽んじる社会の一部の層へ痛烈な批判を加えた。クーデター前、ネジメッティン・エルバカンが党首を務めるイスラーム政党⁽⁷⁾、国民救済党（*Millî Selamet Partisi*, MSP）が国会で議席を有していた。さらに74年から78年にかけては3度連立政権に参加し、現状をいかに改革し、イスラームの理念にかなう発展を目指すかという視点から政策提言を行った（澤江 2005:89-90）。

しかし、1980年代以後、軍は、世俗主義に反しない程度でイスラームをトルコ・ナショナリズムの要素とすることで国民の統合を図ろうとした。これは「トルコ・イスラーム統合論」と呼ばれ、イスラームとトルコ民族のアイデンティティを統合することを目的として、教育現場でイスラームに関する科目が必修化されるなど社会に変化をもたらした⁽⁸⁾。1990年代のトルコのイスラーム復興は、国民統合イデオロギーと対外政策面でのイスラームの重要性が増大するにしたがい、体制がイスラーム（復興勢力）を統制し、管理するという従来のあり方自体が変化を迫られていることによるものであった（澤江 2005:122）。

1993年10月29日—混迷を極める共和国

1990年代前半、共和国は、あらゆる側面において混迷しており、知識人などが過激派によって暗殺される事件が相次いで発生した。連立政権が乱立し、首相には、汚職疑惑が寄せられた。経済では、国家の借金が増え、90年代半ば以降、激しいインフレが起き、失業率が上昇した。1993年3月に急死したオザルの後を継いで大統領となったデミレルは、共和国

(7) イスラーム政党に関して、澤江は、「イスラーム的な規範に依拠しながら、イスラーム的理念に合致する社会の実現を目指して、体制を整え、処方箋として具体的な政策を実施していくもの」（澤江 2005:69）と定義した。

(8) 同様に、アタテュルク主義や世俗化改革、トルコ革命に関する授業が必修となる教育政策が取られた（岩坂 2011）。

記念日に際して、「親愛なるアタテュルク 今日、偉大なるトルコ民族は共和国建国70周年を盛大に祝っています」との書き出しで特別帳簿に「共和国は、あなたが国家主権、自由、正義、発展、繁栄を築いた礎の上にあり、私たちの偉大な国家に果てしない恩恵をもたらしました」と記した。また、「トルコ共和国という国家は、国と民族の不可分の一体性を保持することで、永遠に存続するでしょう」と「国と民族の不可分の一体性」に関しての言及が見られた (*Cumhuriyet* 30 October 1993)。

デミレルの記帳内容からは共和国が混沌とした状況の渦中にあることを読み解くことはできない。他方、「国と民族の不可分の一体性」に関しての言及はこれまでの大統領の共和国記念日演説や記帳内容にはあまり見られていなかった。その背景として、1978年に発足し、1984年にゲリラ戦を開始したクルディスタン労働者党 (*Partiya Karkerên Kurdistanê*, PKK) のテロ活動とトルコ軍との戦闘が激化していたことが考えられる。PKK は、独立クルド国家の樹立を目的としており、トルコの治安部隊や軍に対して攻撃を仕掛けた。1992年にトルコ軍との戦闘で死亡した兵士の数は最多の854名に上り、1993年当時も660人を記録した (*Tezcür* 2016)。

2003年10月29日—公正発展党の台頭と世俗主義者の「抵抗」

2002年11月、解散総選挙で AKP が地滑り的な勝利を収め、議会で過半数議席を獲得、1987年以来の単独政権を樹立した。経済危機が争点となったこともあり、選挙では、約20%の有権者が投票先の政党を変えた (*Çarkoglu* 2002)。2001年の同時多発テロの発生によって再び不安定化し始めた中東情勢において、国民は経済の建て直しと外交的なリーダーシップを求めたのであった。

建国80年の日、セゼル大統領は、「その原則と革命によりトルコ国民に現代文明への道を示した」アタテュルクの指導下で独立戦争を戦い抜き、建国された共和国が建国80年を迎えることを喜ばしく思うと特別帳簿に記した。さらにアタテュルクの原則、特に世俗的で民主的な共和国が「世界に遺した最も大きな財産」とであると強調した。そして、国民はそれを「永遠に守り、発展させことを誓っている」とことと、アタテュルクの原則や理念が「啓蒙と現代化の取り組みに対して引き続き指針」となると書いた (*Cumhuriyet* 30 October 2003)。

セゼルの記帳内容は、現代文明に対しての繰り返しの言及のほか、世俗主義やといったアタテュルクが残した原則を未来永劫守るという誓いが見られる点が特徴と言える。この背景には、AKP の政権獲得があったと考えられる。AKP は、裁判所により共和国の原則である世俗主義に反するとして1998年に非合法化された親イスラーム政党、福祉党 (*Refah Partisi*, RP) の後継政党の一つだった。党首のエルドアンは、イスタンブール市長在職中に世俗主義に反する詩を演説中に引用したとして逮捕され、政党活動を禁止されていたことがあった。

エルドアンは、EU加盟を標榜するなど軍や国家体制の世俗主義者との摩擦を起こさな

いように慎重に言葉を選び政権を運営した（澤江 2005:235-49）。しかし、AKP やエルドアンは軍や司法から警戒されていた。2007 年には世俗主義の原則の遵守に関して軍からの警告が出されたほか、2008 年には党の閉鎖訴訟が提起された。セゼルは、AKP が国民からの支持を獲得していく中で元憲法裁判所長官を務めた大統領としてその政権運営を注視し、AKP が国会を通過させた法案に対して大統領権限により幾度となくその差し戻しを要求するなど警戒を強めていた人物の一人であった。

2013 年 10 月 29 日—AKP 政権下でもたらされた経済成長と発展の中で

90 年の共和国建国記念日、アブドゥッラー・ギュル大統領は、アタテュルク廟を訪れた後に特別帳簿にアタテュルクへの感謝を記した。ギュルは、AKP を創設した RP の若手幹部の一人で首相や外務大臣を歴任した。彼は、ケマル指導下で戦い抜いた独立戦争や、「トルコを現代文明の水準以上に引き上げる」という建国時の目標に向かって、揺るぎない意志と決意を持って前進していると記帳し、「今日、トルコはあらゆる分野で急速に成長し、世界的な魅力のある国となったことを誇りに思っています」と記した。また、「共和国の壮大な成功に誇りを持ち、引き続きこの遺産にしっかりと責任を持ち、新たな進展でこれを更に高みに押し上げるために、忍耐と信念を持って努力しています」と宣言し、共和国の祝日に「国民としてあなたの名前の前に敬意を表し、感謝の気持ちを込めます」とアタテュルクへ謝意を示した（İhlas Haber Ajansı 2013）。

AKP は 2011 年に過去最多の得票率で議会選挙に勝利し、支持基盤を固めていた。政権は、通貨切り下げや増税といった国民に対しての不人気な政策を前政権が実施済みであったため、構造改革の犠牲を国民に強いることなく改革の成果を享受することができた（間 2023:61 - 80）。それにより、さらなる経済改革を行い、政権第一期には国民所得を倍増させた。また、財政改革により財政赤字を縮小させ、EU 加盟交渉の進展により外国からの直接投資額が大幅に城下ほか、インフレ率を 2004 年以降、一桁にまで抑えた。

他方、ゲジ公園の取り壊し計画に反対する小規模な抗議活動が、警察の過剰な弾圧を受けて全国的な反政府運動に発展したのも 2013 年であった。この運動は、自由主義者の知識人や市民の多くが、AKP の民主化への貢献を否定し、政府に批判的な立場をとるきっかけとなった（Uzgel 2012）。

2023 年 10 月 29 日—体制誇示と過去の批判

エルドアン大統領は、建国 100 周年を祝い、トルコの国家の伝統と発展を誇示し、将来の展望を語った（T.C. Cumhurbaşkanlığı 2023）。大統領は、ガーズィ・ムスタファ・ケマル・アタテュルクに敬意を表し、オスマン帝国からの国家の連続性を強調した。ケマルは、国民闘争での戦勝の功績により聖戦士の称号を議会より与えられた。アタテュルクをガーズィと

尊称するエルドアンは、その軍事的功績に敬意を示したが、共和国の原則や世俗主義への言及はなかった。エルドアンは世俗的なトルコ社会で育ち、信心深さと保守的な考え方のために若くして社会的排除に直面したことで、世俗主義体制のやり方に対する根深い反感を持っている (Cagaptay 2020, 8)。アタテュルクへの態度が軟化したのは、民族主義政党と協力するようになってからだと言われる (Soylu 2023)。

また、トルコが地域と世界の抑圧された人々の味方であり、現在まで行ってきた人道支援に言及があった。エルドアン政権期の外交は、ダヴトオール主導の時期とエルドアン主導の時期でその特徴に変化が見られるが、一貫していたのは、地域秩序や国際秩序への貢献と人道外交、オスマン帝国時代の遺産の活用という姿勢であった (今井・岩坂 2023)。

大統領は、「メンデレスが始めた民主化と発展の動き」がクーデターによって中断されたこと、その後もクーデターが繰り返されたことを批判し、自らが2002年に政権に就き「ファシズムの連鎖からトルコを救った」と民主化の業績を誇示した。また、軍政下で公布された現行憲法を「クーデター憲法」と揶揄した。2010年、AKP 主導の憲法改正により、1980年クーデターの首謀者らに対する免責事項が廃止され、訴追が可能となったことで裁判が行われ、2014年にはエヴレン元大統領らに終身刑が下った。

さらに、大統領は、教育、保健医療、司法、交通、住宅、農業、エネルギー、経済、貿易などの分野での数字を紹介し、トルコの成長と発展を示した。そして、イスタンブール空港などのプロジェクト、国産技術開発を例に挙げ、将来の展望についても触れた。今日まであらゆる試練を乗り越えてきたことを強調し、トルコの世紀のビジョンを実現する決意を表明した。エルドアンの国家発展の言説は、有権者に共和国の発展とトルコの国際的地位向上を成し遂げた政党の一員であるという誇りを与え、福祉、繁栄、地位を約束する魅力的な未来像を提供する (Öztürk 2023)。それにより支持者は、エルドアンに対して希望や熱意を感じ、経済危機にもかかわらず、個人的な経済状況や国家の経済状況に対して楽観的な見通しを持ち、エルドアンや政府に対して責任を問わない傾向を持つという。

考察

本節ではCDAの枠組みを用いて、建国から現代までの10年ごとの建国記念日における大統領の言説を分析した。その結果、以下の二つの点が明らかになった。第一に、アタテュルクへの崇拝の言説が1953年より後に顕在化したことである。1943年と1953年の演説では、アタテュルクへの崇拝の言説が見られなかった。これにはアタテュルク廟が1953年の10月には完成しておらず、政治指導者への崇拝を強化する儀式が行われていなかったことが影響

していると考えられる⁽⁹⁾。つまり、1963年以後、アタテュルクへの崇拝の言説が見られるようになったことには、アタテュルク廟が完成し、政治指導者への崇拝を強化する儀式が確立されたことでアタテュルクへの崇拝が社会的に強化されたことを反映していると言える。この点は、先行研究が指摘するアタテュルクへの崇拝形成の時期とは異なる視点を提供しており、本研究の独自性と貢献を示している。

第二に、大統領によって崇拝するアタテュルク像が異なっていたことである。2003年以前の大統領は、アタテュルクの軍人としての功績と共和国の原則を強調した。これは、彼らが軍や司法機関出身者であり、その政治的遺産を守ろうとしたことを示していると考えられる。一方、2013年と2023年の大統領は、アタテュルクの国民闘争の英雄としての側面を崇拝した。これは、彼らが親イスラーム政党出身であり、世俗的な国家の体制に不満を持ち、アタテュルクの政治的遺産を変革しようとしたことを示している。つまり、大統領が維持しようとしたアタテュルクへの崇拝はとりわけ AKP 政権期以降、変容したと言える。この点は、アタテュルクへの崇拝が単一で固定的でなく、多様で動的であることを示している。

5. アタテュルク廟での現地調査の考察

本節では、大統領の言説分析を踏まえ、どのように2023年の記念日を位置づけられるのか2023年10月29日のアタテュルク廟での現地調査をもとに考察する。

午前11時、開門直後ではあったがアタテュルク廟がある丘の上まで続く道は人で埋まっており、立ち止まりながら数歩ずつしか進むことができなかった。しかし、訪問者は、廟に向かう途中も時折、イズミル行進曲⁽¹⁰⁾を合唱し、トルコ国旗を振りかざし、共和国の100年を迎えた熱情に胸を踊らせており、疲れた様子は見られなかった。筆者は、この光景に圧倒されながらも、廟に来ているトルコ国民の一体感やアタテュルクへの敬愛を強く感じた。

およそ2時間をかけてアタテュルク廟がある丘に着いた⁽¹¹⁾。霊廟までの道も献花やトルコ国旗を手向ける人で溢れており、列に並び30分ほどゆっくり進みながら廟の中に入った。廟の前にはたくさんの赤いバラ、トルコ国旗がたむけられていた。廟を訪れた人々は、トルコ国旗を持ったり、アタテュルクがプリントされたTシャツを着たり、あるいは、特に女性に多く見られたが、赤のジャケットや赤のパンツに白地のインターを着るといったトルコ国

(9) イノニュとバヤルは、ケマルと国民闘争を戦った人物でありながら、ケマルの方針に対して不満を抱いたことがあったためだとも考えられる。

(10) イズミル行進曲 (İzmir Marşı) は、ギリシャによる占領からイズミルを解放した際のことを歌った曲で、サビは、「ムスタファ・ケマル・パシャ万歳!」である。

(11) 本来であれば、最寄りの地下鉄駅からアタテュルク廟までは1.3kmで徒歩15分ほどの距離である。



図1 建国100年記念日（2023年10月29日）のアタテュルク廟

出所：筆者撮影。

旗を連想させる服装をしていた。そのほか、軍服を着た男性、ヒジャブの女性たち、100年を記念するTシャツを着た中高年の団体、父親に肩車された小さい子どもから若者、杖をついているようなお年寄り夫婦まで、多くは家族ぐるみで来ているようではあったが、老若男女実に様々な年齢、社会層が見られた。アタテュルク廟に家族とともに訪れたという有権者に100年の建国記念日に際しての想いを尋ねると、世界でも有名な指導者、アタテュルクの創った国で生まれたこと、生きていることを幸せに、喜ばしく思うと述べつつも、100年はずっと違う形で迎えたかったと野党が敗北した5月の選挙のことを暗喩しながら答えた⁽¹²⁾。

年間のアタテュルク廟訪問者数を俯瞰すると統計開始以来、近年では、やや縮小傾向にある(図2)。しかし、2023年10月29日にアタテュルク廟を訪れた人は118万2千人⁽¹³⁾を記録し、過去最多となった(*Sözcü* 30 October 2023)。これは、建国100年を迎えたことによるものであると考えられる。一方で、近年の訪問者数の減少は、アタテュルクのイデオロギーや共和国の価値観に対する国民の関心や支持の低下を反映している可能性もある。この点については、エルドアン政権下でのトルコの政治的・社会的なイスラーム的価値観の表出の強まりな

(12) 筆者によるトルコ人有権者へのインタビュー（2023年10月28日）。

(13) トルコの人口は、2022年時点で8千527万9千553人である（TÜİK 2023）ことから10月29日に廟を訪れた人の割合は全人口の約13.86%、国民の約74人に1人である。

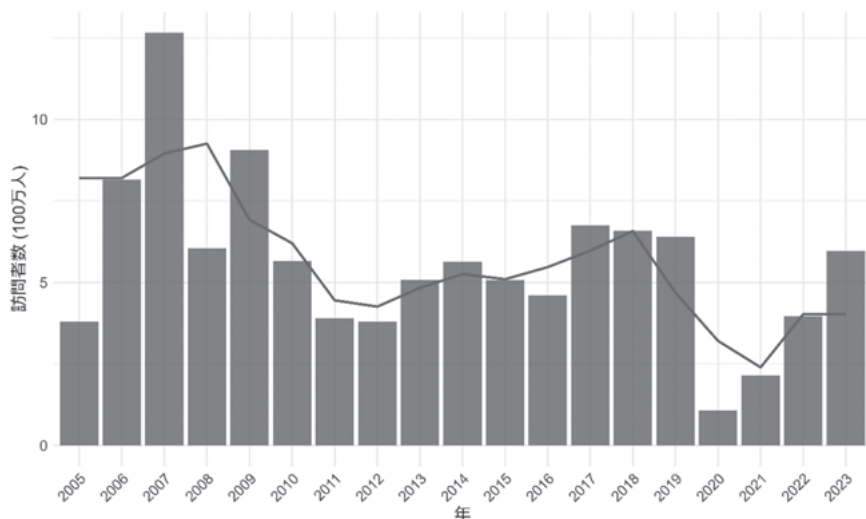


図2 アタテュルク廟年間総訪問者数の推移

注：棒グラフはアタテュルク廟年間訪問者数、折れ線グラフは3年間の移動平均。2023年の総訪問者数は、2023年11月30日までの数値である。

出所：アタテュルク廟公式HP（Genelkurmay Başkanlığı 2011, 2023）より筆者作成。

どの要因を考慮する必要がある。

考察

廟を訪れた国民からは建国の父への敬愛が強く感じられた。国民は、アタテュルクがプリントされたTシャツを着用し、あるいは、赤のジャケットや赤のパンツ、白地のインナーを着るといった国旗を連想させる服装をしていた。また、アタテュルクの墓前にはたくさんの赤いバラ、トルコ国旗がたむけられ、廟の訪問者は、アタテュルクへの崇拝を示していた。

加えて、アタテュルク崇拝の私的空間での現出も見られた。家族単位で自発的に建国記念日に国父を意識した服装に身を包み、揃って廟を訪れることは、アタテュルクへの崇拝の念を強化し、子や孫への崇拝を継承する機会となる。アタテュルクを賛美する歌の存在は、彼自身のカリスマ性を物語風に伝えることに寄与している。さらに、アタテュルクの写真や肉声、動画といった当時の様子を現代に蘇らせる記録が残っていることはアタテュルクへの崇拝の維持と強化に貢献していると言えるだろう。アタテュルクの写真、在りし日の様子が公の場だけでなく、SNSや、家庭においても繰り返し再生されることで、国民にとって当時の様子をより鮮明にまた、身近に思い描くことを可能にするのである。

6. むすびにかえて

本稿は、トルコ共和国建国 100 周年を契機に、アタテュルクに対する国民の崇拝の変遷と持続の過程を明らかにすることを目的とした。建国から現代までの 10 年ごとの記念日における大統領の言説を CDA の枠組みから検討した結果、アタテュルクへの崇拝の言説が 1953 年より後に顕在化したこと、大統領によって崇拝するアタテュルク像が異なっていたことがわかった。また、国民のアタテュルクへの崇拝の現代的様態を考察し、100 年の記念日においても国民は国父への敬愛を以て廟を訪れていたことを示した。

本稿は、先行研究に二つの新たな知見をもたらした。第一に、大統領の言説と建国記念日という観点から、アタテュルク崇拝の形成と維持、強化の過程を明らかにした。これにより本稿は、先行研究が大統領の発言や建国記念日という崇拝の儀式的性質を有する日に焦点を当てた分析を欠いていたことを補い、トルコ政治研究へ貢献した。第二に、Márquez (2018) のモデルのトルコへの適用とフィールドワークの接合である。本稿は、Márquez のモデルの外的妥当性を示し、モデルを拡張した。さらにフィールドワークから政治指導者崇拝の強化で重要とされる儀式的様態を分析し、政治指導者崇拝の研究に貢献した。

本研究の限界としては、大統領によるアタテュルクへの崇拝が顕著になった時期の特定ができていない点が挙げられる。1963 年以後、アタテュルクは偉大な指導者として大統領の言説において崇拝されていたが、1953 年からの 10 年間のどの時点で変化が生じたのかを分析することは今後の課題としたい。また、本研究では、大統領の言説と国民によるアタテュルク崇拝の関係については、直接的な証拠を得ることができなかった。大統領の言説が国民の崇拝にどのような影響を与えているのかを明らかにするためには、より多角的なデータの収集と分析が必要である。今後の研究では、大統領の言説以外のメディアや教育などの要素も考慮に入れたり、国民の意識調査やインタビューなどのデータも活用したりすることで、アタテュルクに対する国民の崇拝の形成と維持の過程をさらに深く考察したい。

謝辞

本稿執筆にあたっては多くの重要なご助言を頂きました。記して感謝を申し上げます。本稿に残された誤りの責はすべて筆者に帰します。

参考文献

[トルコ語文献]

- Aytürk, İlker, and Berk Esen, eds. 2022. *Post-Post-Kemalizm: Türkiye Çalışmalarında Yeni Arayışlar*. İstanbul: İletişim Yayınları.
- Firidinoğlu, Nilgün. 2011. “Faruk Nafiz Çamlıbel’in ‘Kahraman Destanı’ ve Yazınsal Metnin

- Üretim Sürecinde İdeolojik Zorunluluğun Rolü.” *Tiyatro Eleştirmenliği ve Dramaturji Bölümü Dergisi* (17):85–97.
- Genelkurmay Başkanlığı. 2011. “Anıtkabir Ziyaretçi Sayısı.” *Genelkurmay Başkanlığı Resmi Kurumsal İnternet Sitesidir*. https://web.archive.org/web/20110809093822/http://www.tsk.tr/10_ARSIIV/10_6_Anitkabir_Ziyaretci_Sayisi/anitkabir_ziyaretci_sayisi_2010.htm (November 30, 2023).
- . 2023. “Anıtkabir Ziyaretçi Sayıları.” *Anıtkabir*. https://www.anitkabir.tsk.tr/05_etkinlikler_duyurular/anitkabir_ziyaretci_sayilari.html (November 30, 2023).
- İhlas Haber Ajansı. 2013. “Abdullah Gül, Anıtkabir Özel Defteri’ni imzaladı İhlas Haber Ajansı.” *İhlas Haber Ajansı*. Retrieved November 20, 2023 (<https://www.ihh.com.tr/haber-abdullah-gul-anitkabir-ozel-defterini-imzaladi-308381>).
- Köprülü, Gülşah. 2018. “Cemal Gürsel Dönemi Türk Dış Politikasının Dinamikleri.” *Akademik İzdüşüm Dergisi* 3(3): 34–56.
- T.C. Cumhurbaşkanlığı. 2023. “100. Yıl Hitapları.” *Türkiye Cumhuriyeti Cumhurbaşkanlığı*. <https://www.tccb.gov.tr/konusmalar/353/149944/100-yil-hitapları> (December 6, 2023).
- Köprülü, Gülşah. 2018. “Cemal Gürsel Dönemi Türk Dış Politikasının Dinamikleri.” *Akademik İzdüşüm Dergisi* 3(3):34–56.
- T.C. Resmî Gazete. 1951. *Atatürk aleyhine işlenen suçlar hakkında Kanun*. Vol. 7872.

[英語文献]

- Akin, Ezgi. 2023. “Turkey’s Super Cup in Saudi Arabia Canceled over Reported Atatürk Row.” *Al-Monitor*. <https://www.al-monitor.com/originals/2023/12/turkeys-super-cup-saudi-arabia-canceled-over-reported-ataturk-row> (December 30, 2023).
- Akkoyunlu, Karabekir. 2023. “One Hundred Years of Kemalism.” Pp. 53–65 in *A Companion to Modern Turkey’s Centennial: Political, Sociological, Economic and Institutional Transformations Since 1923*, edited by A. Özerdem and A. E. Öztürk. Edinburgh University Press.
- Bozdoğan, Sibel. 2002. *Modernism and Nation Building: Turkish Architectural Culture in the Early Republic*. New edition. Seattle, WA: University of Washington Press.
- Cagaptay, Soner. 2020. *The New Sultan: Erdogan and the Crisis of Modern Turkey*. Bloomsbury Publishing.
- Carkoglu, Ali. 2002. “Turkey’s November 2002 Elections: A New Beginning?” *Middle East Review of International Affairs* 6(4):30–41.
- Çaymaz, Birol. 2019. “The Construction and Re-Construction of the Civil Religion around the Cult of Atatürk.” *Middle Eastern Studies* 55(6): 945–57.

- Davies, James C. 1954. "Charisma in the 1952 Campaign." *American Political Science Review* 48(4):1083–1102. doi: 10.2307/1951012.
- van Dijk, Teun A. 1993. "Principles of Critical Discourse Analysis." *Discourse & Society* 4(2):249–83. doi: 10.1177/0957926593004002006.
- . 2005. "War Rhetoric of a Little Ally: Political Implicatures and Aznar's Legitimation of the War in Iraq." *Journal of Language and Politics* 4(1):65–91. doi: 10.1075/jlp.4.1.04dij.
- Fairclough, Norman. 2013. *Critical Discourse Analysis: The Critical Study of Language*. 2nd ed. London: Routledge.
- Geddes, Barbara. 2003. *Paradigms and Sand Castles: Theory Building and Research Design in Comparative Politics*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Hale, William. 1993. *Turkish Politics and the Military*. 1st edition. London ; New York: Routledge.
- Huntington, Samuel P. 1991. *The Third Wave: Democratization in the Late 20th Century*. Norman, Okla.: Univ of Oklahoma Pr.
- Kucukcan, Talip. 2010. "Sacralization of the State and Secular Nationalism: Foundations of Civil Religion in Turkey."
- Linz, Juan J. 2000. *Totalitarian and Authoritarian Regimes*. 1st edition. Boulder, Colo.: Lynne Rienner.
- Lipset, Seymour Martin. 1959. "Some Social Requisites of Democracy: Economic Development and Political Legitimacy." *American Political Science Review* 53(1):69–105.
- Lüküslü, Demet. 2016. "Creating a Pious Generation: Youth and Education Policies of the AKP in Turkey." *Southeast European and Black Sea Studies* 16(4): 637–49.
- Mansillo, Luke. 2016. "Loyal to the Crown: Shifting Public Opinion towards the Monarchy in Australia." *Australian Journal of Political Science* 51(2):213–35.
- Márquez, Xavier. 2018. "Two Models of Political Leader Cults: Propaganda and Ritual*." *Politics, Religion & Ideology* 19(3): 265–84.
- Öztürk, Aykut. 2023. "Whisper Sweet Nothings to Me Erdoğan: Developmentalist Propaganda, Partisan Emotions, and Economic Evaluations in Turkey." *Democratization* 0(0): 1–23.
- Ozyurek, Esra. 2006. *Nostalgia for the Modern: State Secularism and Everyday Politics in Turkey*. Durham, NC: Duke University Press Books.
- Soylu, Ragip. 2023. "Turkey at 100: How Erdogan Made My Family Embrace Ataturk's Legacy." *Middle East Eye*. <https://www.middleeasteye.net/opinion/turkey-100-erdogan-made-family-embrace-ataturk-legacy-how> (December 31, 2023).

- Tezcür, Güneş Murat. 2016. “Ordinary People, Extraordinary Risks: Participation in an Ethnic Rebellion.” *American Political Science Review* 110(2):247–64.
- TÜİK. 2023. *The Results of Address Based Population Registration System, 2022*. Türkiye İstatistik Kurumu. <https://data.tuik.gov.tr/Bulten/Index?p=49685> (November 8, 2023).
- Türköz, Meltem. 2014. “Fathering the Nation. From Mustafa Kemal to Atatürk.” *Traditiones* 43 (1):53–64.
- Tyler, Tom R. 2006. “Psychological Perspectives on Legitimacy and Legitimation.” *Annual Review of Psychology* 57(1):375–400. doi: 10.1146/annurev.psych.57.102904.190038.
- Uzgel, İlhan. 2012. “Riots, Resistance and Repression: Notes on the Gezi Protests.” *The Turkish Yearbook of International Relations* (43):197–206.
- Weber, Max. 1946. *From Max Weber: Essays in Sociology*. New York: Oxford university press.
- Yanarocak, Hay Eytan Cohen. 2017. “My Rival Is My Teacher: Erdoğan in the Footsteps of Atatürk.” *Turkeyscope* 2(1): 1–5.

[日本語文献]

- 新井政美. 2001. 『トルコ近現代史—イスラム国家から国民国家へ』 みすず書房.
- 今井宏平. 2017. 『トルコ現代史：オスマン帝国崩壊からエルドアン時代まで』 中央公論新社.
- 今井宏平・岩坂将充. 2023. 『エルドアン時代のトルコ 内政と外交の政治力学』 岩波書店.
- 岩坂将充. 2011. 「トルコにおける軍の『公定アタテュルク主義』の模索と世俗主義」 粕谷元 編『トルコ共和国とラーイクリキ』 共同利用・共同研究拠点イスラーム地域研究拠点上智大学イスラーム地域研究機構. 3–31頁.
- 小笠原弘幸. 2023. 『ケマル・アタテュルク - オスマン帝国の英雄、トルコ建国の父』 中央公論新社.
- 櫻田智恵. 2023. 『国王奉迎のタイ現代史：プーミポンの行幸とその映画』 ミネルヴァ書房.
- 澤江史子. 2005. 『現代トルコの民主政治とイスラーム』 ナカニシヤ出版.
- 間寧. 2023. 『エルドアンが変えたトルコ：長期政権の力学』 作品社.

トルコ日刊紙

Akşam

Cumhuriyet

Sözcü

インタビュー

トルコ人有権者へのインタビュー、2023年10月28日、至トルコ共和国・アンカラ